

## 最初のをを忘れることなくーリッチ学長の来訪に寄せてー

学院長 嶋 田 順 好

押川方義牧師と共に宮城学院と東北学院を創立したウィリアム・E・ホーイ宣教師の母校ランカスター神学校からキャロル・リッチ学長夫妻が来仙され、7月18日に本学を訪問してくださいました。東北学院大学ブランディング事業「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」の一環として東北学院大学がご夫妻を招聘し、出村彰名誉理事、鐸木道剛東北学院大学教授の仲介により、姉妹校である宮城学院にもご夫妻が足を運んでくださることになったのです。

折角の機会ということで、リッチ先生には大学礼拝で説教をしていただきました。先生はルカによる福音書8章4節～15節の「種蒔きの譬え」を取り上げ、「道端」「石地」「茨」「良い土地」と場所を選ぶことなく農夫がひたすら種を蒔き続けた不思議さについて触れます。そのことを通して、徒勞をいとわず神の言葉が、いつでもどこでもすべての人に宣べ伝えられることの重要性を伝えてくださいました。自らが蒔かれた神の言葉を豊かに宿らす良い土地となり、今度は蒔く者となって東北学院へ、宮城学院へと遣わされた多くの宣教師たちの働きを思い起こさずにはいられない説教でした。

歓迎昼食会の席上で、リッチ先生はランカスター神学校のサンティー・チャペルにあるミッシヨナリー・ステンドグラスと呼ばれているステンドグラスのレプリカを寄贈してくださいました。先生によれば、礼拝堂のステンドグラスはその共同体のコア・アイデンティティを物語る重要な役割を担っているということですが、そこには「種まき」、「収穫」、「サマリアの女」、「世の光キリスト」の姿が描かれていました。いずれも宣教師の使命を明瞭に告げる聖書的主題です。しかも驚くべきことにそのステンドグラスの一番下のところには、ひっそりと日本を象徴する富士山と神社の鳥居が描かれてあったのです。

この一事からもランカスター神学校とその学校を生み出したジャーマン・リフォーメド・チャーチが、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」(マタイ 28:19)との主イエスの御言葉をどれほど真剣に受けとめ、「地の果て」(使徒言行録 1章 8節)までもその使命を全うしようとしたかがよく理解できます。それこそがランカスター神学校のコア・アイデンティティであり、しかもその「地の果て」とはほかならぬ日本であったのです。このことは統計的事実からも明らかとなります。

メソジスト派、長老派、組合派などの教派に比べるとジャーマン・リフォーメド・チャーチは、信徒数 20 万人足らずの小さな教派でした。にもかかわらず、ほぼ 130 年の歴史のなかで、初期と後期と不幸な戦争の時代を除くと一貫して毎年 10 名以上の宣教師を派遣して宮城学院を支えてくださったのです。これは真に驚嘆すべきことです。昨年、札幌にある長老派系のミッションスクールの北星学園は、創立 130 周年を迎えました。その間北星学園には 59 名の宣教師、外国人教師がミッション・ボードから派遣されてきています。ほぼ同じ期間、宮城学院には合計 160 名の宣教師が派遣されてきているのです。これらの事実からもジャーマン・リフォーメド・チャーチの特別な祈りと愛が、どれほど集中的に宮城学院に対して捧げられ、覚えられていたかがよく理解できるのではないのでしょうか。

宮城学院の「建学の精神」は観念でも、思想でも、教えでもありません。キリストが人となって世に来られたことに倣い、故郷を離れ、日本へ、仙台へ、宮城学院へ遣わされた多くの宣教師たちの「神を畏れ、隣人を愛する」献身の事実裏打ちされているのです。エレミヤ書 2 章には神の愛を忘却したイスラエルの背信の姿が「わたしはあなたを、甘いぶどうを实らせる/たしかな種として植えたのに/どうして、わたしに背いて/悪い野のぶどうに変わり果てたのか」と告げられています。それ故、宮城学院は神によって遣わされたホーイ宣教師、プールボー宣教師、オールド宣教師をはじめとする多くの宣教師とその背後にいた多くの米国の信徒たちの「最初のを」を忘却し、風化させることなく、この時代のただなかで種を蒔き続ける働きを全うしていかなければなりません。リッチ学長の来訪は、わたしたちに今一度「最初のを」をまざまざと思い起こさせてくださる恵みの出来事となりました。